



1 作 物

項 目	作 業 内 容																				
<p>(1) 普通期                      水稻の管                      理・収穫</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○普通期水稻の管理・収穫</li> <li>○次作の水田雑草防除</li> <li>○大豆の管理</li> <li>○麦の種子とほ場の準備</li> </ul> <p>ア 水管理・落水</p> <p>登熟期間は間断かん水により土壌を湿潤気味に管理する。                      落水時期が早いと玄米の粒厚が薄くなり、品質・食味低下を招くため、収穫5～7日前の落水を基準とし、天候や水田の状況を見て判断する。また落水日までは水を張っておき、一気に落水する。</p> <p>イ 収穫適期</p> <p>本年の普通期水稻の出穂時期は平年並～やや遅いものの、登熟期間を通じて高温で推移したため、成熟期は平年並と予想される。向こう1か月の平均気温は平年より高い見込みであり(9月14日高松气象台発表の1か月予報)、成熟期が早まる場合もあることから、収穫にあたっては下表を参考にほ場観察を行い、適期収穫に努める。</p> <p>ひめの凜は刈遅れを防ぐため、黄変籼率85%に達したら刈り始める。ヒノヒカリは、刈り遅れると茶米が混ざり品質が低下しやすいので注意する。</p> <p>表 水稻の収穫適期の基準</p> <table border="1" data-bbox="435 1424 1388 1624"> <thead> <tr> <th></th> <th>ひめの凜</th> <th>ヒノヒカリ</th> <th>にこまる</th> <th>松山三井</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>出穂後日数(日)</td> <td>37～43</td> <td>40～46</td> <td>42～48</td> <td>50～57</td> </tr> <tr> <td>最長稈黄変籼率(%)</td> <td>85</td> <td>85</td> <td>90</td> <td>90</td> </tr> <tr> <td>積算温度(℃)</td> <td>900～1,000</td> <td>900～1,050</td> <td>1,000～1,150</td> <td>1,050～1,200</td> </tr> </tbody> </table> <p>ウ 乾燥・調製</p> <p>収穫した籼は、長時間堆積したまま放置すると品質が低下するため、収穫後は速やかに乾燥を行う。食味低下を防ぐため、乾燥温度はできるだけ低温に設定し、乾減率は毎時0.8%程度とする。高水分籼(25%以上)は水分ムラが多いので、一度35℃以下で乾燥し、水分を20%に下げた後、再び通常の熱風温度で乾燥する。玄米の仕上がり水分は14.5%を目標とし、過乾燥(14%以下)</p>		ひめの凜	ヒノヒカリ	にこまる	松山三井	出穂後日数(日)	37～43	40～46	42～48	50～57	最長稈黄変籼率(%)	85	85	90	90	積算温度(℃)	900～1,000	900～1,050	1,000～1,150	1,050～1,200
	ひめの凜	ヒノヒカリ	にこまる	松山三井																	
出穂後日数(日)	37～43	40～46	42～48	50～57																	
最長稈黄変籼率(%)	85	85	90	90																	
積算温度(℃)	900～1,000	900～1,050	1,000～1,150	1,050～1,200																	

項 目	作 業 内 容
<p>(2) 次作の水田雑草防除</p> <p>(3) 大豆の管理</p> <p>(4) 麦の種子とほ場の準備</p>	<p>や高水分（15%以上）とならないよう注意する。</p> <p>籾摺りでは、ゴムロール等の消耗部品の交換や調整を事前に行い、玄米の肌ずれや胴割れ米の発生、籾混入を防止する。</p> <p>調製では、必ずライスグレーダーを使用し、ふるい目 1.85 mm 以上で入念に選別作業を行い、整粒割合 80%以上を目標に仕上げる。</p> <p>近年は除草剤だけに頼った雑草防除が増えており、除草剤が効きにくい難防除雑草が増加している。ノビエ等の一年生雑草は、放置すると多量の種子を作り、次年度の多発生につながるの、なるべく早い時期に抜き取る。ミズガヤツリ、クログワイ等の多年生雑草は、地下茎や塊茎で繁殖するため、水稻収穫後、非選択性茎葉処理剤のスポット散布や、反転耕で土中の塊茎を露出させ、乾燥と寒気で枯死させるなどする。また、地域の広範囲で特定の雑草が残る場合は、除草剤の変更を検討する。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;">  <p>写真1 ノビエ</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>写真2 クログワイの塊茎</p> </div> </div> <p>大豆は子実肥大期～成熟期となる。この時期にはほ場が長時間湛水すると、根痛みによる登熟不良を引き起こすほか、倒伏した莢が浸水すると腐敗粒増加の要因となるため、収穫期まで明渠の補修や排水口との接続等により停滞水の排水に努める。</p> <p>ア 種子の準備</p> <p>麦は自然交雑が起こりやすく、自家採種を続けると品種特性の劣化や混種、変種が起こるため、2～3年に1回は種子更新を行う。</p> <p>また、種子伝染性病害（裸黒穂病、斑葉病など）を防除するため、種子消毒は必ず行う。薬剤はベンレートTコート（乾燥種子重量の0.5%粉衣処理）などを用いる。多量に種子消毒をする場合は、種子消毒機を使うと便利であるため、JAによる機械の貸出しを活用する。</p>

項 目	作 業 内 容
	<div data-bbox="475 338 1270 656" data-label="Image"> </div> <p data-bbox="815 667 1054 701">写真3 裸黒穂病</p> <p data-bbox="432 748 775 784">イ 播種前のほ場の準備</p> <p data-bbox="459 795 1382 1120">         麦の播種期の多雨は出芽不良や減収を招くため、湿害対策は万全に行う。特に水稲の後に麦を栽培するほ場では、降雨後速やかに排水し、適期の播種が可能となるほ場を準備する必要がある。このため、水稲収穫後はできるだけ速やかに、額縁明渠（写真4）や弾丸暗渠（写真5）を施工し、ほ場の乾燥に努める。チゼルプラウ耕（写真6）を併用すると土壌が乾きやすくなり、播種時の碎土性が向上する。       </p> <div data-bbox="475 1149 719 1487" data-label="Image"> </div> <p data-bbox="432 1500 762 1534">写真4 額縁明渠の施工</p> <div data-bbox="847 1149 1315 1491" data-label="Image"> </div> <p data-bbox="847 1500 1174 1534">写真5 弾丸暗渠の施工</p> <div data-bbox="577 1559 1161 1854" data-label="Image"> </div> <p data-bbox="703 1868 1031 1901">写真6 チゼルプラウ耕</p>

(作成 農林水産研究所)